

## 文学

イ コンジェ  
李建濟 (立命館大学コリア研究センター客員研究員)



キムチェヨン  
金在湧 編

『万宝山事件と韓国近代文学』(図書出版亦楽、2010年)

金在湧編、『萬寶山事件과 한국근대문학』도서출판 亦樂, 2010

本書は、長年の間親日文学を研究してきた円光大学国文科の金在湧教授の責任編集のもと出版された『植民主義と文化叢書』の第13巻に該当する。

中国東北地域に暮らす中国農民と移住した朝鮮の農民との間で起こった水をめぐる争いに端を発する万宝山事件は、満州地域のみならず朝鮮にまで影響をおよぼし、さらに平壤をはじめとする朝鮮内の中国人殺人にまで至る悲劇をも生んだ。当時、朝鮮の知識人らの間に「民族意識の過剰」という憂慮を醸成したこの惨劇は、理性を失った民族意識が帝国主義によってどのように利用されるのかを劇的に示した出来事であった。

1931年に起こったこの出来事にたいして、韓国の作家は1930年代末に入ってからようやくこの事件を素材にして作品を書き始めた。李泰俊イテジュンの短編小説「農軍」、安壽吉アンスギルの中編小説「稲」、そして張赫宙チャンヒョクチュの長編小説『開墾』は、万宝山事件に関連する作品である。したがって、この三つの作品に対する個別的理解はもちろんのこと、三作品を比較することは非常に重要である。本書においては張榮遇チャンヨンウ、李炫政イヒョンジョン、金鶴童キムハクトン、李相瓊イサンギョンの論稿がこのような問題意識の下に書かれたものである。

張榮遇は「『農軍』と万宝山事件」で李泰俊と安壽吉の小説および日本のプロレタリア文学作家である伊藤永之介の短編小説「万宝山」を分析し、この三つの小説は歴史的事実を比較的きちんと描写していると評価した。それに比べて李炫政は「失われた民族を満州で想像する——李泰俊の「農軍」における朝鮮人の叫び」で、李泰俊の「農軍」のみに焦点を絞って分析し、この小説には親日的な面も民族主義的な面もあるとしたうえで、むしろこの小説を通じて作家が朝鮮民族の集団的アイデンティティの形成過程を想像していく面に注目すべきとした。金鶴童は「張赫宙の『開墾』と万宝山事件」で、張赫宙の長編小説『開墾』を分析し、この作品こそが日帝の国策に忠実に従った作品であるとした。李相瓊は「李泰俊の「農軍」と張赫宙の『開墾』を通じてみる日帝末期作品の読み方と検閲」で、李泰俊と張赫宙の作品を対比・分析し、二作品は検閲という時代的限界の中で書かれたが、相対的に「農軍」のほうが『開墾』よりも朝鮮農民の苦難を包括的に描き出しているとした。

これらの作品は日中戦争へと続く東北アジア全体の構造の中で検討される必要があるが、責任編集者の金在湧の二編の論稿が、そのようなアプローチを試みている。「日帝末韓国人の満州認識」において金在湧は、1938年10月に日帝による武漢三鎮の陥落後、広く流布した「東亜新秩序」を契機として満州と「満州国」に対する文学的関心が高まり始めたとし、この時期から朝鮮総督府の積極的介入と動員政策が本格化したと指摘する。また、「内鮮一体」の延長としての「満州国」認識——張赫宙の『幸福な百

姓』を中心に」では、在満朝鮮人の立場も多様で、大きく分けると日帝に包摂された「開拓」の立場と、包摂されなかった単なる「移住」の立場があったとした。そして「開拓」の立場の中にも「満鮮一如」の視線と「内鮮一体」の視線が存在したが、張赫宙はこのうち後者の視線を採っており、長編小説『幸福な農民』はその代表作であるとした。

万宝山事件を扱った朝鮮の作家たちの問題意識を深く理解するためには、当時の日本および中国の作品との比較も必要である。金虎雄<sup>キムホウウン</sup>は「万宝山事件を扱った東アジア三国の小説比較——安壽吉の中編小説「稲」を中心に」のなかで、伊藤永之介の短編小説「万宝山」、中国のプロレタリア文学作家である李輝英<sup>リフイイン</sup>の長編小説『万宝山』、そして朝鮮作家李泰俊の短編小説「農軍」および安壽吉の中編小説「稲」を比較した。ここで金虎雄は、伊藤永之介が日本人を傍観者的な位置に置くという限界を見せた反面、李輝英は中国共産党の図式に忠実なあまり実際の歴史的事実を歪曲したと指摘する。さらに、朝鮮作家である李泰俊は伊藤永之介のように日本との関係から目をそむけてはいるが、これは日帝の検閲を避けるためであったと主張している。また朝鮮作家である安壽吉は、他の誰よりも満州における三民族の微妙な力関係と朝鮮人ディアスポラの生および苦悩を最もリアルに、バランス感覚よく描き出したと評価している。これに対して張榮遇は「万宝山事件と韓日小説の対応——「万宝山」「農軍」「稲」を中心に」で、安壽吉でさえ日本の介入に対して沈黙していた事を批判している。張榮遇は、この沈黙の背景に、当時の厳しい検閲制度があったことに言及している。

1930年代に中国で起こった「万宝山事件」は、一国ではなく東北アジア全体にわたる重要な歴史的問題であることを肝に命ずるべきであろう。編者の序文にあるように、本書にまとめられた上記の論文を通じて、韓国近代文学への理解がより深まるであろうことはもちろん、東アジアの相互理解の通路がより一層開かれることを期待する。



コンイムスン  
孔任順 著

『スキャンダルと反共国家主義』(図書出版エルピ、2010年)

孔任順『스캔들과 반공국가주의』 도서출판 엘피, 2010

本書の著者である若手国文学者の孔任順は、これまで歴史学と文学を架橋する学際的研究を行っており、今回の著書でもその成果を見せている。

本書は「大韓民国／南韓」の誕生を一種の「スキャンダル」すなわち「醜聞」と捉える。大韓民国／南韓の誕生そのものが植民地期の親日人物が集まった韓民党と米軍政との蜜月関係の産物である。親日清算を拒否し「人民主権」を国家保安法で封じ込めた大韓民国／南韓の必然的帰結は、「反共国家主義」だった。大韓民国／南韓の初代大統領李承晩<sup>イスンマン</sup>は反共国家を大韓民国／南韓のアイデンティティの確固たる定

礎としたが、著者はこの過程で周縁的な存在だったパルチザンと越南人〔北緯 38 度線以北から南側に来た人〕が内部の敵対を外部へと転嫁するためにどのように利用され、その過程で「人民主権」という近代国民国家の原理がどのように消し去られ忘却されたのかを「パルチザンと越南人、李承晩の再現／代表性の二つの記標〔シニフィアン〕」で叙述している。

朝鮮半島が南北韓に分断され各自の体制と正統性を構築する様相を象徴的に示した出来事に「金日成<sup>キムイルソン</sup>の真偽論争」がある。この論争をつうじて南北韓の冷戦構造と相手を敵視し自己の体制を正当化した社会歴史的展開の様相を分析したのが「金日成の青年像をめぐる（南）北韓の象徴闘争」である。

本のタイトルに使われている「スキャンダル」に相応しい論考が「女流<sup>モユンスク</sup>名士毛允淑、親日と反共の二重奏」である。毛允淑と国連韓国臨時委員団インド代表だったメノン（Krishna Menon）のスキャンダルは、一人の「女流文人」に関する興味深い逸話（episode）にとどまらず、大韓民国／南韓を誕生させた米軍政、親日人物、李承晩の密室政治の断面を見せる重要な出来事である。またこれは、李承晩が毛允淑に作らせた「楽浪クラブ」の親交のジェンダー・ポリティクスにまでつながっていく。

大韓民国／南韓はアメリカとの強固な同盟関係を自負するが、じっさい、大韓民国／南韓はアメリカの下位軍事力の同盟体にほかならない。著者は「韓国の人文学が直面した監禁と自由の 21 世紀版パラドクス」を通して、大韓民国／南韓を含む第三世界「らしさ」のイデオロギー的表象と 21 世紀版人文学のパラドクスがもつ意味を追跡している。この過程で韓国の学界は自分の「植民性」を告発しようとしたあまり、帝国の「帝国性」をめぐる議論を看過し、その学問的成果をニューライト勢力に奪われてしまっていると指摘する。

植民地たる大韓民国／南韓と植民帝国間の相互依存性と並行は、金活蘭と朴仁徳によって代表されるキリスト教的近代の主体とも深く連関する。著者は帝国主義的感情と欲望の生成および肉体化が、親日と親米につながる大韓民国／南韓のキリスト教を取り巻いているという事実を、「キリスト教的近代主体の誕生と親交のジェンダー・ポリティクス——<sup>キムファルラン</sup>金活蘭と<sup>パクインドク</sup>朴仁徳」で分析する。そして「転向」の日常化あるいは生存の協力」で、このキリスト教的近代主体の形成の裏側に、植民地期の社会主義者たちの転向が存在したことを指摘している。著者は後者の転向にキリスト教的近代主体の福音と救援という普遍的な人類愛とはまた異なる、コスモポリタンに向けられた根深い羨望と憧憬があったことを明らかにした。

「朴正熙の「革新」と独白の体系」では、国民に代わって語るという代議制民主主義が宗教的信心主義と結託することで生じる、戦慄すべき結果を示している。これは「愚かな国民」に代わって「偉大な事業」を施行せんとする現政府の「信心」政策とも相通じるものがある。

「女性の肉体に刻まれた滅亡の標識」「植民地期における古代史の再発見と女性の墮落」「今、歴史小説は世界のテクストを夢見る」などでは、ドラマ『善徳女王』と<sup>キムトンイン</sup>金東仁の長編小説『白馬江』、<sup>キムフン</sup>金薫の長編小説『刀の歌』といった小説をつうじて、歴史小説や興亡史物語は、非常に脱イデオロギー的かつ非政治的だと思われる時でさえ、国家政策のイデオロギーとして機能することになるという点を確認している。そして「大衆幻想物」をつうじて類似の論理を展開したのが「破壊されたものへの憧憬、その幻想の植民地主義的正体」である。

総じて、最初の論稿「帝国の文化政治と「脱」植民解放闘争」で提示された「植民地人の民族意識は

まずはじめに到来するものではなく、最後の最後に獲得されるべきもの」と述べた脱植民主義の批評家アルベール・メンミの言葉が、本書の全体の精神を代弁しているのではなかろうか。

(訳 金友子)